

筑波大学女子ハンドボール部オランダ遠征

河村レイ子, 山田永子

1. はじめに

今回のオランダ遠征は、筑波大学女子ハンドボール部 35 周年記念事業の一環として企画された海外遠征が、今年ようやく実現したものである。本計画は、オランダで行われる「Handball Week」に参加し、チーム力と個人スキルを向上させることが主な目的である。

ハンドボールを学ぶ本学学生に、ハンドボールの本場であるヨーロッパで海外の選手たちとの交流を通して、国際性とコミュニケーション能力を高めるためにも有意義な企画であると思われる。

今回参加した「Handball Week」が開催されたのは、オランダの首都アムステルダムからおおよそ 90km 離れた地方都市 Raalte で、人口 3 万 8 千人の静かな町である。2011 年 12 月 26 日から 30 日までの 5 日間を快適に過ごすことが出来た。このイベントの主催者は Carmel handball school で、参加したチームはオランダ代表 U-18、ドイツ代表 U-18 と地元ラールテのクラブチームと筑波大学である。筑波大学から

は、女子ハンドボール部員 16 名と大学院生や卒業生等 10 名、合わせて 26 名の参加であった。大会の内容は、参加チームとの公式試合や合同練習、元日本代表女子チーム監督であったオランダ人のベルト・バウアー氏をはじめオランダ代表チームや Carmel handball school の指導者による講習会等であった。また、地域の子供たちを対象としたハンドボール教室の指導も行った。

2. Handball Week について

Handball Week のパンフレットに掲載された筑波大学チーム紹介の日本語訳を以下に記述する。(日本語訳は社会学類の中黒英造さんをお願いした)

『筑波大学

筑波大学のハンドボールチームは、日本のハンドボール界においてトップチームの一つであり、我らのリーグの他のチームと比べても決して見劣りすることなどないだろう。昨年(2010)の 1 月



ラールテ



ハンドボールウィーク

にはもうすでに、この遙か遠い、日出ずる国のチームから「ハンドボール大会に参加できないだろうか?」といった話が出ていた。それはとても驚くべきことであった。なぜなら地球の反対側にある国へほんの数試合、また少しの練習のために来ることは普通ならばあり得ないことなのだから。その半面、日本の女子ハンドボール代表チームが北京オリンピックに向けての準備のために、このラールテに数回訪れていたことから、我々にとって驚きは少なかったとも言える。当時はベルト・パウワー監督が、ラールテのハンドボールスクールと、その施設について詳しく知っていたため、この街に日本代表チームが来ることは早々に決まっていた。

日本から来たメンバーの一人に、山田永子さんがいた。彼女は筑波大学でコーチングをしており、これから指導者としてやっていきたいという希望を持っている。永子さんは、2009年末から2010年初にかけての二週間で行われた前回大会に、ゲストとして参加していた。それは彼女の大学での研究であるインターナショナルコーチングにとって重要な経験となったであろう。昨年2月に送った我々からの招待は、非常に残念なことながら、日本を大きな自然災害が襲ったためキャンセルとなってしまっていた。何人かの選手達は、その親族が被害にあったり、家屋等の物が破壊されてしまったりしたこともあったようだ。日本中で海外への旅行が減り、数多くの国際的なスポーツ大会を棄権せざるを得ないような状況に陥ってしまったらしい。その後、8月になり再び我々のもとに「大会へ参加させてもらえないか?」という素晴らしい便りが届いた。それを断る理由など、どこにもなかった。私たちは皆、遠く離れた土地でも、このラールテのハンドボールスクールが気に入られ、良い印象を与えていることを非常に誇りに思う!このチームは、今年で引退する監督に向けて、6日間のオランダの旅、そのうち4日はラールテでハンドボールをし、残りの日はもちろんアムステルダムでクリスマスシー

ズンを過ごすという素晴らしい思い出をあげられたのではないか。我々は彼女たちのチームがラールテで素晴らしい時間を過ごすこと、そしてこれからもこの日本のハンドボールチームとの良い関係が続くよう、お互いに連絡を取り合うことを期待するばかりである。』

このイベントでは、6歳の子供たちから成人のチームまで各年代別に分けられたチームの試合や練習だけでなく、指導者の講習会や審判講習会が同時に開催されていた。会場は正式のハンドボールコートがとれる体育館が2面とサブ体育館が1面で、そこで午前9時30分から17時30分まで1時間30分毎に年代やチーム別のプログラムが生まれ講習会や練習が行われた。さらに、17時45分から22時までは公式戦が3試合開催された。夜間で有料の試合にも関わらず、毎回200～300人の観客が声援を送ってくれた。

筑波大学が参加したプログラムを以下に紹介する。

- 27日 ベルト・パウアー氏による防御練習
ゴールキーパーコーチによるゴールキーパー指導
オランダトップリーグに所属するKwickとの試合
- 28日 ベルト・パウアー氏による攻撃練習
オランダ代表女子U-18チームとの試合



ベルト・パウアー氏との記念撮影

29日 ドイツ代表女子U-18チームとの合同練習

11、12歳チームの指導

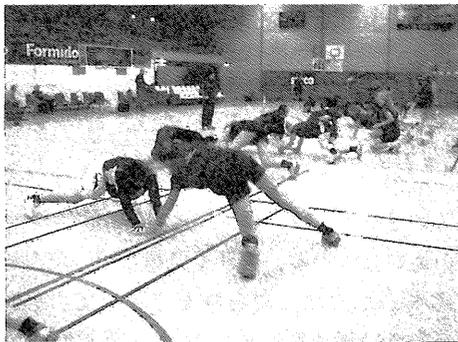
オランダタレントチームとの試合

30日 ドイツ代表女子U-18チームとの試合

オランダ代表女子U-18チームとの試合

3. 練習や試合について

ここでは、6歳からトップレベルのチームまで各年代別にチームが編成され、同じクラブで一貫して指導を受けられるという環境が整っていることが一番印象的だった。このシステムの中では、日本のように一つのチームが体育館を長い時間独占することではなく、一回の練習時間が1時間30分程度と限られている。より多くの人々がハンドボールに親しむことでハンドボールの普及につながる、そして短時間集中で内容



合同練習



ハンドボール教室の様子

の濃い練習をすることは選手の育成にとっても効果的であると思われる。このような環境の中で育った選手たちは、15～16歳でシュートや1対1の個人技術・戦術ともに完成に近いことを実感した。このなかから優秀な選手を集めて代表チームとしてトレーニングをつめばそのチームも強いわけである。

今回は30分ハーフの試合を5試合行い、結果は以下の通りである。

Vs ラールテ	19 (13-7 6-16)	23
Vs オランダユース	25 (13-15 12-10)	25
Vs オランダタレント	22 (11-16 11-13)	29
Vs ドイツユース	27 (11-12 16-14)	26
Vs オランダユース	35 (17-16 18-17)	33

ゲームスコアから見ると、オランダユースやドイツユースは国を代表するチームであり、それらのチームと接戦できたことから、筑波大学チームは善戦したと言える。対戦相手は年齢こそ若いですが、身長が180センチを越す選手が多く、シュートや1対1の突破力に優れていた。一方、筑波大学の選手は平均身長が163.9センチと小柄であるが、フットワークを駆使したチームディフェンスから速攻につなげ、また、セットプレーでは素早いパスワークやクロスプレーでシュートチャンスを作り得点出来た。試合に出る機会の少ない控えの選手にも経験を積ませるために、スタートメンバーに入れたり、



ドイツ、オランダタレントチームとの記念撮影

メンバーチェンジしたりして、16人の選手全員で戦えたことも良かった。

3日目には山田コーチの指導のもと、選手はグループ別に地元クラブチームの11～12歳の子供たちの指導補助をした。はじめの10分間は子供たちに折り紙で折り鶴の折り方を教え、子供たちとも良いコミュニケーションがとれた。指導内容は、グループ毎に動き作りでウォーミングアップをしたあと、パスキャッチやシュート、1対1や3対2の攻防である。子供たちは、日本から来た大学生に親しみをこめて接してくれた。

4. 学生の感想

参加した学生の感想文を紹介する。

「ドイツのように当りの強いディフェンスに対して、1対1を攻めることが出来なくて、簡単にシュートを打ってしまいGKにとられてしまった」

「身長の高い相手に対して、ディフェンスの上からロングシュートを打つのではなく、ディフェンスの間やブラインドにしてシュートするのが有効だった」

「オランダでは人々とハンドボールの深い関わりというものを凄く感じた」

「ドイツの選手のように強く1対1をかけられるようにする」

「オランダ遠征で海外のトレーニングや練習に興味を湧いたので自分でも調べてみる」

「海外の選手と戦って多くの刺激を受けた。大きな選手に対するディフェンスの仕方、大きいGKに対するシュートの工夫等実際に体験できて良かった」

「普段対戦することのない170～180cmの選手を相手に、何が通用して何が通用しないかが分かって良かった」

「サイドシュートでは、ヨーロッパの人は腕が長いのでいつも受けているサイドシュートよりも外からボールが来るので、位置を合わせきれ

なかった」

「ポストに入って身長差のある人に守られて、ボールをもらうことが出来なかった。ブロックの仕方やボールのもらい方を工夫しなくてはならないと思った」

「身長が高くシュート力のある人には手首やボール、腕をもっと見て我慢してキープ出来るようにする。GKは素早い位置取りをして、ボールを正面で受けることが大事である」

「ディフェンスの時利き腕に入ること、アウトカットインを守ることが出来て、位置取りの重要さが分かった」

「言葉は通じなかったが、ハンドボールという競技を通して他国の人と分かりあえるという良い経験が出来た」

「ディフェンスの時、大きな選手がスピードで入ってくるロングシュートに対して、下がってしまっ上から打たれることが多かった」

ここでは、主なコメントを列記したが、学生は様々な気づきや発見、確認があったように思われる。

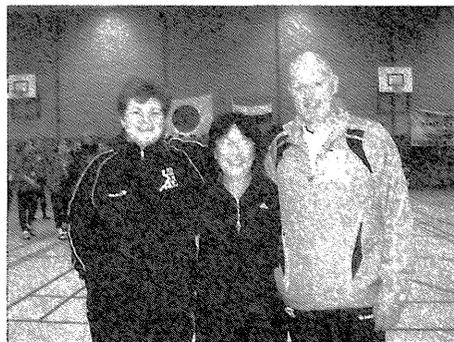
5. まとめ

この遠征で、ヨーロッパと日本のハンドボールの違いについて、これまで感じてきた点を再確認出来たのは大変有意義であった。ハンドボールの技術や戦術面での違いだけではなく、それぞれの国におけるスポーツを取り巻く環境や指導システムの違いを認識することが出来た。

今回多くの方々の協力を得て筑波大学女子チームとしてオランダへ遠征することが出来た。「百聞は一見にしかず」と言うが、ハンドボールの本場ヨーロッパで参加者全員が貴重な経験をすることが出来た。選抜チームではなく、気心の知れたチームメイトとの海外遠征は、お互いに気を遣いすぎることなく練習や試合に集中出来たという声が学生からあがった。それは単独チームとしての遠征の優れた点である。

オランダで大変お世話になったマネージャーの Henny 氏をはじめ、皆さんはボランティアとして運営にあたっていると聞き、頭が下がる思いである。ベルト・パウアー氏から現チームの課題であったディフェンスの完成に向けて大きな示唆を得られたこと等、チーム力強化に向けても有意義な遠征であった。

筑波大学チームの遠征を快く受け入れてくれたオランダハンドボールの関係者や、遠征に帯同してくれて選手のサポートに回ってくれた大学院生、卒業生のお陰で充実した日々を過ごせたことに感謝したい。



タレントチームの指導者